

鶏の飼育環境を改善して長く飼う

The 北海道ファーム



出入り自由の鶏舎と道産飼料で

「The 北海道ファーム」はもともと千葉県の葬祭会社。香典返し用のお米の栽培を栗山町で始めたところ、結構な量のくず米が出ることが判明。それを使って何かできないかと、養鶏を始めることにした。ここでは採卵鶏を育てている。

夏は一坪あたりに1羽！冬でも同4羽！という自由すぎる環境で鶏たちは伸び伸びと暮らしている（多くの採卵鶏は羽を広げることできないようなスペースで飼育されている）。

鶏舎の中もかなり広いフリースペースを設けているが、外には放牧場があり、鶏たちは自由に内と外を行き来できる。暑いと外に出たがらず、日陰や鶏舎に入ってくるという。一口に「放牧」と言っても、暑さを凌げないなど過酷な環境で動物が辛そうな場

面も見かけるので、自由に選べるのは最高だ。

餌はほぼ北海道産。くず米や米ぬか、水産加工場から出てくる牡蠣殻、魚粉などを無駄なく食べさせている。「すべて道産」と言い切れないのは、ビタミンなどのサプリを与えているから。あげていない時に鶏の状態がよくなかったとのこと。餌だけでは補えないものを足している、という感じだ。

餌にこだわっても、鶏の健康状態が悪ければ本末転倒で、個人的には「全て自然のものだからOK！」とは思わない。鶏のためにも、こんな風に足りないものは補えばいいのではないか。

群れの安定にオスが同居

ワクチンは打たないけれど、病気の発生は特にないという。これだけ十分なスペースがあり、フレッシュな空気が流れ、太陽の光を浴びることができる環境では、よほどのことがない限り健康だろうなあ、と鶏たちを観ながらしみじみ思った。

群れの状態を安定させるために、メス100羽に対して1～3羽入れているオスは、いつも周りに目を配っている。「なんてカッコいいんだ！」と惚れ惚れした。その佇まいも素敵だ。

オスの鶏も入れて群れの安定を保つ

床には稲藁が分厚く敷かれていて、毎年どんどん補充していく。何年分も積み重なっている状態で、そこには糞尿もあるはずなのだが、嫌な臭いはなかった。

改善したい運搬・屠殺の方法

代表の栗原直樹さんのお話で印象的だったのが、卵を産む役目を終え「廃鶏」になる時のことだ。カゴに詰めて鶏たちを業者のところに持って行き、置いてくるのがとても辛い作業で、その時期は従業員も口数が減るという。

農場の外に家畜を出すときは、辛い気持ちになる方が少なくない。そのような感情になるのは自然なことだ。少しでもそういう気持ちを和らげるには、家畜たちが不安や恐怖や痛みをできるだけ感じないように、運搬や屠畜



道産飼料を食べて育った鶏の卵



夏場は鶏舎と放牧場を自由に行き来できる

の方法を改善していくことも重要ではないか。

採卵鶏は一般的に1年半から2年で短い生涯を終える。しかし、「The 北海道ファーム」では、3年もしくはそれ以上を目指している。

農場を見学して感じたことは、栗原さんたちが鶏に対して愛情を持って向き合っているということだ。

大事に思い、観察し、向き合って改善していくことは、鶏のためにはもちろん、農場経営やそこで働く人にそのまま返ってくる。ハッピーな循環に乗ってしまえば、畜産業界で働く人の心身のストレスもだいぶ減るんじゃないか。

「命」を扱う仕事だから心が揺さぶられる場面は少なくない。最後まで命を命として考え、動物と人が苦しむことを減らしたい。（菊地 純子）

※ The 北海道ファーム

北海道栗山町字旭台 168 - 63

☎ 0123-72-2422

H P : thehokkaido-farm.co.jp/